新宿区
SHINJUKU CITY

蔦屋重三郎と新宿ゆかりの江戸文化人

特集

蔦屋重三郎と新宿ゆかりの江戸文化人

今年の大河ドラマ『べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～』は、革新的なアイデアと広い人脈で江戸の出版界をリードした蔦屋重三郎（以下、蔦重）の生涯が描かれる。蔦重に関連する人物は、喜多川歌麿、東洲斎写楽、曲亭馬琴、大田南畝、山東京伝、十返舎一九など多士済済だ。

寛延三年（一七五〇）、江戸の吉原（※）に生まれた蔦重は、地元で書店を開業し、その後日本橋に進出する。幕府公認の遊郭・吉原は様々な文化人が集まる「文化サロン」的な存在でもあり、日本橋は繁華な商業地であった。

一方、現在大都会である新宿は、当時は日本橋から離れた場末のまち。だがここにも蔦重と交遊のあった文化人が暮らし、文芸を愛好する集まりが催されていた。

本特集では、蔦重と新宿ゆかりの江戸文化人たちの人物像や作品を紹介し、山の手で花開いた江戸文化を紹介していきたい。また後半では文化人たちが暮らした牛込や宿場町・内藤新宿の面影を訪ねていく。

※幕府公認の遊郭である吉原は、江戸時代初期は現在の人形町付近（中央区）にあったが、1657年の明暦の大火後に治安や風紀上の問題から現在の千束（台東区）に移転した（新吉原）

手柄岡持（朋誠堂喜三二）のもとに集った10人の狂歌師たち。11人目に「蔦唐丸」の狂名（狂歌上のペンネーム）で参加し、筆と紙を用意して何か面白いものを書いてもらおうとする蔦重のしたたかな姿も描かれている。恋川春町作・画の黄表紙『吉原大通会（よしわらだいつうえ）』より（国立国会図書館所蔵）

蔦屋重三郎の時代に花開いた

天明狂歌と新宿

蔦重が活躍した時代背景と、蔦重と関係の深い新宿ゆかりの江戸文化人について、主に天明狂歌ブームを中心に見ていこう。狂歌を中心に江戸の文芸・文化を研究する法政大学教授の小林ふみ子さんに話を聞いた。

天明期の江戸文化をリードした武士階級

蔦重が活躍したのは、老中の田沼意次が幕府の実権を握っていた時代（明和四年〔一七六七〕～天明六年〔一七八六〕）の後半です。年貢収入を増やそうにも限界があるため、田沼は積極的に商人に上納金を出させる政策を行いました。同業組合である「株仲間」に市場の独占を許す営業許可証を発行し、その見返りとして金銭を徴収したのです。こうした経済システムのなかで商業が発展し、江戸のまちは繁栄していきました。

幕府が開かれて一五〇年ほど経ち、新興都市の江戸が経済的にも社会的にも、そして文化的にも成熟してきた時代でもあります。文芸の中心が段々と上方から江戸に移っていく、いわゆる「文運東漸」の中で、それまで「江戸者」と卑下していた自身を「江戸っ子」と自称して、それを誇りにするような時代がやってきたのです。江戸文化の隆盛には、江戸のような時代背景がありました。

よく「江戸時代は町人文化が隆盛した」と言われます。確かに元禄の頃（一六八八～一七〇四）は上方で町人文化が花開きましたが、蔦重が活躍し始めた時代の江戸のまちでは、太平の時代に教養と時間を持て余した武士階級が文芸をリードしました。大田南畝は幕臣ですし、川春町は駿河小島藩の藩士、誠堂喜三二は出羽久保田藩の留守居役です。

天明年間（一七八一～八九）の狂歌ブームを牽引した彼らは、新宿にゆかりの深い人物でした。当時の新宿は、江戸の中心地であった日本橋などから見ると周縁地。甲州街道の宿場町にあたり、江戸四宿のひとつですが、他の三宿（千住、品川、板橋）に比べると周辺に武家地が多いことが特徴で、江戸城の西側、市谷や牛込には旗本や御家人の屋敷が数多くありました。天明狂歌について「武士と町人が垣根なく交流した」とユートピア的に語られることがありますが、南畝の門下生のなかでも、地元牛込周辺の「四方連」や小石川あたりの「赤松連」は武士が多く、日本橋本町や馬喰町周辺のグループは町人が多い、というように、居住地域から来る身分ごとに活動は分かれていました。もちろん、武士と町人のグループ間の交流はあり、互いに行事に参加していました。

太平の世を讃え山の手を愛する

天明狂歌ブームのお話をする

小林ふみ子 さん
法政大学文学部教授

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。著書に『天明狂歌研究』（汲古書院）、『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店・角川ソフィア文庫）、編著に『絵入 吉原狂歌本三種』（太平書屋）など

前に「そもそも狂歌とは何か」をご説明しましょう。五七五七七で構成した和歌の一種で、ふざけた発想やことば遊びを詠みます。この頃にはすでに俳諧や川柳が隆盛していて、芭蕉の風流なものとは異なり、ことば遊びに近い詠み方が、その門人・宝井其角から続く江戸座の俳諧の流れとしてありました。俳諧や川柳で「一句ひねってみる」「知と戯れる」ことが、人々の楽しみとして基盤にあったのです。この頃、存義や二世祇徳といった俳諧の師が亡くなり、主導する人がいなくなったため、より勢いがあって楽しそうな狂歌に人々が集まったのでしょう。

石川雅望（いしかわまさもち）＝宿屋飯盛（やどやのめしもり）編、北尾政演（まさのぶ、山東京伝）画『古今狂歌袋（ここんきょうかぶくろ）』（刊行は蔦屋重三郎／都立中央図書館所蔵）。百人一首を模して、100人の狂歌作者の狂歌と肖像を収録。四方赤良（よものあから）は大田南畝の狂名

狂歌の遊び方は和歌と同様に、「お題」を決めてそれに対して狂歌を作る「題詠」が基本です。面白おかしく読むためにことば遊びが行われますが、社会風刺のようなものは見られません。南畝はむしろ「かりにも落書などといふ様な鄙劣（卑劣）な歌をよむ事なき」と書いているように、風刺はしないと宣言しています。彼らは江戸の太平の世の日常を、ポジティブな気持ちで愛していました。後年、松平定信の寛政の改革を皮肉って「世の中にか（蚊）ほどうるさきものはなし ぶんぶ（文武）といひて夜もねられず」という落首が世の中に広まり、その作者が南畝だとささやかれましたが、本人は否定しています。

南畝の暮らす牛込は、江戸の中でも無粋とみなされる下級武士の住む鄙びた地ですが、南畝はその土地への愛着を「山手閑居記」などで堂々と書き連ね、美しいところもそうでないところも描き出し、どんなところも面白がろうという姿勢で臨みました。そこに一儲けしてやろうと目をつけた本屋（蔦重）がやってきたら、惜しげもなく原稿を与えてそれもまた楽しみ、狂歌仲間になることで名前を売ろうとする人が近づいてきても、大らかに受け容れて面白がる。そんな心の余裕が南畝や狂歌師仲間にはありました。蔦重はそんな彼らの本を出し、自身も狂歌を作る仲間となり、人脈を広げていきます。

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（角川ソフィア文庫）1,386円

小林ふみ子さんの
著書紹介

狂歌ブームの仕掛け人・大田南畝は、言葉のセンスをどのように磨き上げ、人々を笑いの渦に巻き込んでいったのか？ 平賀源内や山東京伝にも一目置かれ、蔦屋重三郎の良き助言者であった大田南畝の狂歌活動がわかる決定版。

COLUMN

江戸のメディア王、蔦屋重三郎

寛延3年（1750）、吉原で生まれた“蔦重”こと蔦屋重三郎は、24歳で吉原大門の近くで書店兼貸本屋「耕書堂」を開店。版元・鱗形屋孫兵衛版の『吉原細見』（吉原の公式ガイドブック）の小売を開始し、のちに編集を任される。平賀源内に序文を依頼し、『吉原細見』をリニューアルして評判に。自らが版元となり絵本形式の遊女評判記『一目千本』を刊行する。

その後、鱗形屋が経営難に陥り、蔦重は独自の『吉原細見』を刊行。サイズを変更することでページ数を減らし、紙代や版木代が浮いた分、販売価格を下げた。レイアウトも変更して見やすくなり、大ヒット。33歳で版元の並ぶ日本橋通 油町（現在の中央区日本橋大伝馬町）に進出して本屋を開く。

敏腕の版元として知られるようになった蔦重は、恋川春町、朋誠堂喜三二、山東京伝、大田南畝などと交流し、彼らの作品を出版。狂歌本の他にも、黄表紙、洒落本、俳諧、謡曲の教本、暦書、漢籍、算術、和学書などあらゆるジャンルの本を手掛けている。

寛政の改革によって幕府から公序良俗を乱す版元と見なされ処罰を受けるが、その後は規制をかいくぐり、喜多川歌麿や東洲斎写楽の浮世絵、京伝や曲亭馬琴、十返舎一九の黄表紙や滑稽本を出版して流行を仕掛ける。学問奨励の気運にも乗り、書物問屋仲間に加盟して専門書・学術書の出版に力を入れるなど、商魂たくましく活動。本に広告を入れたり、作家に原稿料を払う仕組みを導入したりするなど、現代につながる出版のビジネスモデルも生み出した。

浅草菴作、葛飾北斎画『画本東都遊（えほんあずまあそび）』に描かれた蔦重の書店「耕書堂」（国立国会図書館所蔵）

多くの人々に狂歌を通じて楽しい文芸活動への参加の機会を与えた南畝と、その活動を支えた蔦重。次のページからは、南畝をはじめとする天明狂歌を担った人々や、新宿ゆかりの江戸文化人について、その生涯や作品を紹介する。

山東京伝作、北尾重政画『堪忍袋緒〆善玉』に描かれた蔦重（国立国会図書館所蔵）

新宿ゆかりの江戸文化人

「江戸」と言えば日本橋、神田、浅草などが思い浮かぶが、ここ新宿にも江戸時代、文化の花が開いた。新宿が発祥とされる天明狂歌を担った人々を中心に、新宿ゆかりの江戸文化人を紹介しよう。

天明狂歌を牽引したマルチ文化人 大田南畝

寛永二年（一七四九）―文政六年（一八二三）

宿屋飯盛編、北尾政演（山東京伝）画『吾妻曲狂歌文庫（あずまぶりきょうかぶんこ）』（版元は蔦屋重三郎／都立中央図書館所蔵）に描かれた大田南畝（四方赤良）。代表的な狂歌作者50人の肖像画と狂歌を集めた絵本。狂歌は宿屋飯盛の撰で、挿絵は山東京伝が描いた。狂歌作者に奇抜な扮装をさせ、和歌の名人の姿を描いた「歌仙絵」に見立てて王朝歌人風に描いている（P3の『古今狂歌袋』は『吾妻曲狂歌文庫』の評判を受けて狂歌師を100人に増やしたもの）

寛延二年（一七四九）、下級幕臣の子として牛込中御徒町（現在の新宿区中町）で誕生。近所の内山賀邸の私塾に通い、学問を学ぶ。幕臣の賀邸は「江戸六歌仙」に数えられる歌人で、狂歌が好きだったこともあり、門人たちもこぞって狂歌を楽しむようになった。田安家の家臣で四谷に住む唐衣橘洲（※）、幕臣で新宿の二十騎町に住んでいた朱楽菅江、田沼意次に勘定組頭に登用された旗本・土山孝之、内藤新宿で煙草屋を営む平秩東作など様々な人が賀邸のところに出入りする。

学問に秀でていた南畝は十九歳で狂詩集『寝惚先生文集』を出し、脚光を浴びた。この出版を手伝ったのが二〇歳ほど年上の平秩東作で、序文は東作のつながりで平賀源内が寄せた。また、大根太木や酒上熟寐など狂歌や小咄を通じて滑稽を愛する先輩たちとの出会いもあり、こうした大人たちが身近にいる環境で、南畝は才能を発揮していく。

やがて南畝は、狂名を「四方赤良」と名乗り、皆で集まって遊ぶ狂歌の楽しさにのめりこむ。明和七年（一七七〇）、橘洲や南畝など六人が狂歌を読み、賀邸と萩原宗固（四谷に住む歌人・和学者で幕臣）の二人を判定人とする「明和十五番狂歌合」が開催され、天明狂歌の流行がここに始まったとされている。

蔦重との出会いは、南畝が黄表紙評判記『菊寿草』の中で蔦重が刊行した朋誠堂喜三二作『見徳一炊夢』に高い評価をつけたことから。これに喜んだ蔦重が南畝を訪ねたのが最初とされており、以来、蔦重は南畝やその仲間たちを接待して人脈を作り、狂歌集を度々刊行するようになった。南畝は蔦重の母の墓碑銘を作成するなど、個人的にも親交を重ねていた。

大田南畝の肖像（野村文紹『肖像2之巻』国立国会図書館所蔵）

こうして狂歌師、戯作者、漢詩人、随筆家など多彩な顔を持つマルチ文化人として知られた南畝であったが、田沼意次の失脚後、幕政の舵を取った松平定信が推進した「寛政の改革」による風紀の取り締まりがその勢いを削ぐ。交遊のあった土山孝之は死罪となり、恋川春町は「寛政の改革」を風刺したとして召喚を受け、応じないまま病死。南畝も狂歌・狂詩などの文芸活動を一時自粛するが、一方で学問奨励の世の中となり、本業が幕臣である南畝は幕府の「学問吟味」（朱子学の学力試験）に挑み、お目見え以下の部の主席で合格する。四八歳で勘定奉行配下の支配勘定という役職に任用され、ささやかではあるが出世を果たし、役人として記録文書の整理などに携わった。幕府の主要な輸出品であった銅の管理のために大坂銅座に赴任すると、「蜀山人」の号で狂歌を再開。江戸に戻った後も随筆や歌集に作品を残し、漢詩も作り、書物の収蔵、書写、抜き書きは生涯にわたって行うなど常に文筆と向き合った人生であった。

上／大田南畝が暮らした牛込中御徒町の現在の様子　下／こちらの「江戸切絵図 市ヶ谷牛込繪圖」（部分）は安政4年（1857）のもの。左上に3列に並ぶ「御徒組」のうち、中央の列が南畝の屋敷があった中御徒町

TOPIC

デビュー作『寝惚先生文集』

南畝が19歳で出した狂詩集で、南畝の名が江戸中に知られるようになるきっかけとなった一冊。狂詩とは、漢詩の形式に、日本語の俗語や流行語を取り入れたり、あえて語法を誤用したりして、そのギャップから生じる滑稽味を楽しむもの。当代の漢詩人たちの『〇〇先生文集』の形式を模擬しながら江戸の風俗や流行を描き出している。

個人蔵

※「橘洲」の読み「きつじゅう」については、岩田秀行氏の論文に基づいています。「「東洲斎」の読みについて」（『浮世絵芸術』165巻、2013年、国際浮世絵学会）https://www.jstage.jst.go.jp/article/ukiyoeart/165/0/165_1610/_article/-char/ja/

小林ふみ子先生おすすめ

南畝の狂歌

あなうなぎ
いづくの山の
いもとせを
さかれてのちに
身をこがすとは

『あなうなぎ』とは「穴鰻」ならぬ、古語の『あな憂(＝ああ、つらいな)』です。『物事が突然、意味なものに変化する』という意味の慣用句『山芋が化けて鰻になる』という言葉をベースとし、『いづくの山のいも』＝『どこの山の芋かはわからないが』、恋人同士を表す『妹背』という古語を『芋』と『背中』に掛け、無理やり仲を裂かれて身を焦がすような想いにもだえるように、鰻も背を裂かれて炭火で焦がされてつらいなあ、と鰻の身になって同情してみせています

早蕨(さわらび)の
にぎりこぶしを
ふりあげて
山の横つら
はる風ぞ吹く

蕨をゲンコツになぞらえることは昔からあり、平安時代の小野篁(おのたかむら)の詩の一節『蕨は人手を拳(にぎ)る』でも知られています。その蕨が生える山の斜面を顔に例え、その横面を『張る』に『春風』を掛けています

山の手賛歌の「山手閑居(かんきょ)記」

狂文(※)集『四方のあか』に収録されている「山手閑居記」は、南畝が自宅のあった牛込周辺の環境を記したものだ。

歌川豊国・二代歌川広重「落合ほたる」
(「江戸自慢三十六興」)(新宿歴史博物館所蔵)

わが庵は松原とをく海ちかくと詠けんむさし野の広小路に、むすべる芝のはてにもあらず、ちはや振神田浅草のにぎやかならぬも、よしや足引の山の手になんすめりける。春は桃園の花に迷ふ外山の霞たたぬ日もなく、夏は江戸川の蛍をみる目白の滝の音たえず、秋は高田のかりがねに、民の貢(みつぎ)の未進をあはれみ、冬は富士を根こぎにしてわが鉢の木の雪とながむ。(以下略)

冒頭は太田道灌の和歌「わが庵は松原つづき海ちかく富士の高嶺を軒端にぞみる」のオマージュ。神田の「神」には「ちはやぶる」、山手の「山」には「足引きの」と枕詞を掛けている。当時の牛込は江戸の中心に比べると鄙(ひな)びていて、由緒ある芝やにぎやかな神田、浅草とは異なるが、それらもよしあしだ、(ここでも「あし」をかけている)と言う。春は桃園(現在の中野区)の花と外山(新宿区戸山)の霞、夏は江戸川(神田川の中流域)のホタルや目白の滝(音羽の滝、現在の文京区)の音、秋は高田(現在の豊島区)の田んぼに舞い降りてくる雁の声に哀しみをおぼえては、年貢が納められない農民の苦労を想う。冬は富士山が近くに見えてまるで庭にあるかのようだ、と山の手の自然美を讃えている。

一方で、続く文章では屋根が壊れかけたうら淋しい寺や、街娼が神社をねぐらとしていること、貧しい裏長屋などについても触れ、そんな一面も合わせて南畝はこの山の手を愛した。大名屋敷が建ち並ぶ丸の内や、商家が軒を連ねる日本橋の豪勢な街並を、決してやせ我慢ではなく、うらやましいとは思っていない。

落合や高田馬場で月見

安永4年(1775)、南畝は朱楽菅江ら仲間と連れ立って落合(新宿区)周辺に出かけ、月見を楽しんだ。『望月帖』はその時の様子を描いたもので、南畝は次のように文を寄せている(現代語訳)。

百人町のあたりに質素な家を訪れ、皆で手を取り合って一緒に月明かりの下を歩いた。月にはわずかな雲がかかって光がちらつくが、月の姿は小川の流水に映っていよいよ清らかである。(中略)こうして渡って来た橋のこちら側には俗塵(ぞくじん)も少なく、行き交う車馬も少ない。ここで思う存分に歓を尽くして、世間のことにとらわれた俗人の心を忘れよう。

安永8年(1779)8月13日から17日まで、高田馬場の信濃屋という茶屋で5日連続の月見の宴を催したこともある。その席で作られた参加者の連歌・俳諧・狂文・狂歌・狂詩を『月露草』にまとめている。

『望月帖』は穴八幡宮の所蔵で、新宿歴史博物館には複製が展示されている

※ 狂歌の精神を散文化したもの

天明狂歌の元祖『狂歌若葉集』編纂

唐衣橘洲

寛保三年（一七四三）―享和二年（一八〇二）

市谷生まれ。田安徳川家の家臣。四谷忍原横丁（現在の新宿区須賀町）に住み、内山賀邸に学ぶ。同門の大田南畝や平秩東作らを誘って自宅で狂歌会を開き、それが天明狂歌の発生源となった。主な作品に『狂歌若葉集』『狂歌初心抄』など。

世にたつハ
くるしかりけり
腰屏風
まがりなりにハ
折かゞめども

『吾妻曲狂歌文庫』で描かれている橘洲の狂歌。「世の中を上手に生きるのは難しい。屏風のように身をかがめて慎ましく生きているのだが」

深い学識を有する内藤新宿の煙草屋

平秩東作

享保十一年（一七二六）―寛政元年（一七八九）

内藤新宿の生まれ。生家の商売は馬宿で、自身は煙草屋を開業。内山賀邸の門下で、南畝の『寝惚先生文集』刊行にあたっては版元須原屋市兵衛を紹介し、南畝の名を世に知らしめる契機を作った。田沼政権にも深く関わって蝦夷地探索にも従事。墓所は善慶寺（新宿区富久町二―十二）にある。

善慶寺にある東作の墓。この墓は東作が両親のために建てたもので、裏面の墓碑銘は東作が書いたもの。「男懐之敬建」（東作の本名は立松懐之）の文字が見える（新宿区指定史跡）

挿絵は宿屋飯盛編、北尾政演（山東京伝）画『吾妻曲狂歌文庫』（都立中央図書館所蔵）

南畝、橘洲と共に狂歌の三大家

朱楽菅江

元文五年（一七四〇）―寛政十年（一七九九）

牛込の二十騎町に住む幕府御家人。狂名は「あっけらかん」をもじったもの。大田南畝、唐衣橘洲と共に天明狂歌ブームを担う。橘洲の『狂歌若葉集』に対抗して、南畝と共に『万載狂歌集』を編んだ。古今和歌集をもじった『故混馬鹿集』なども編集。

朱楽菅江が率いる朱楽連の狂歌師たち36人が1首ずつ詠んだ彩色摺狂歌絵本『潮干のつと』（「潮干狩りのみやげ」という意味）。36種の貝と関連美人風俗図を喜多川歌麿が描いた。刊行は蔦屋重三郎（国立国会図書館所蔵）

狂歌や黄表紙、浮世絵まで手掛ける

恋川春町

延享元年（一七四四）―寛政元年（一七八九）

狂名は「酒上不埒」。駿河国小島藩松平家の江戸詰の家臣で、俳諧をよくし、みずから挿絵も手掛け黄表紙を出版、狂歌にも参加するなど多才であった。黄表紙『金々先生栄花夢』が評判に。『鸚鵡返文武二道』で「寛政の改革」を風刺したとして幕府から出頭を命じられ、応じないまま病死した。墓所は内藤新宿の成覚寺にある。

恋川春町の文と絵による『金々先生栄花夢』（国立国会図書館所蔵）。内容は、いわゆる「夢オチ」。栄華を望んで江戸へ出た男が、うたた寝をして、夢の中で金持ちの養子となるが、遊蕩して勘当されたところで目が覚め、故郷へ帰るストーリー

江戸払いで新宿に暮らした国学者

宿屋飯盛（やどやのめしもり）

宝暦三年（一七五三）―天保元年（一八三〇）

浮世絵師・石川豊信の子で、国学者名は石川雅望（まさもち）。大田南畝のもとで狂歌を学ぶ。家業である小伝馬町の宿屋の営業をめぐり嫌疑をうけ、江戸払いとなって角筈（つのはず）村や内藤新宿（どちらも新宿区）に暮らしたこともある。その間、和学研究に心血を注ぎ、江戸に戻ってからは狂歌師としても復活した。

三度たく
米さへこはし
やはらかし
おもふまゝには
ならぬ世の中

便々館湖鯉鮒の狂歌碑に刻まれた狂歌。「毎日炊く米飯でさえ、硬かったり柔らかかったりして思うようにならないのだから、世の中の事も自分の思う通りにいかない」

常圓寺にある便々館湖鯉鮒狂歌碑（新宿区指定史跡）

有名な狂歌「三度たく…」の作者

便々館湖鯉鮒（べんべんかんこり ふ）

寛延二年（一七四九）―文政元年（一八一八）

幕臣で、牛込山伏町に居住。宿七―十二―五）にある狂歌碑は死の翌年に建てられたもので、狂歌仲間であった大田南畝の筆による。

朱楽菅江や唐衣橘洲に狂歌を学ぶ。墓所は光照寺（新宿区袋町十五）。常圓寺（新宿区西新

『南総里見八犬伝』は人気となり、歌舞伎や浮世絵の題材にもなった。歌川国芳「里見八犬伝」（都立中央図書館所蔵）

後世に読み継がれる『南総里見八犬伝』

曲亭馬琴（きょくていばきん）

明和四年（一七六七）―嘉永元年（一八四八）

本名は滝沢解（たきざわかい）。読本作者。深川の生まれで、父は旗本の家に仕えていた用人。蔦重の店の手代として勤めていた時期もあった（同様に、十返舎一九も勤めていたことがある）。

天保七年（一八三六）、神田から四谷信濃坂（新宿区霞ヶ丘町十四―一、新宿区指定史跡「滝沢馬琴終焉の地」）の鉄砲同心組屋敷へ転居。文化十一年（一八一四）に『南総里見八犬伝』の刊行を開始。目を患った馬琴は息子の嫁に口述筆記をさせ、二八年の歳月をかけてこの地で九八巻一〇六冊を完成させた。

COLUMN

錦絵の始まりは牛込から

牛込の旗本が依頼し、春信が創始した錦絵

浮世絵版画は江戸時代初期、墨一色から始まり、やがてそこに筆で彩色をしたものや、紅や緑などの色版を摺り重ねた版画が誕生した。今日、私たちが北斎の「冨嶽三十六景」などでイメージするような多版多色刷りの浮世絵が誕生するのは、明和２年（1765）に浮世絵師の鈴木春信（1725～1770）が手がけた「大小暦（だいしょうれき）」が始まりとされている。

大小暦とは、その年の月の大小（1カ月が30日ある月が「大」、29日ある月が「小」）がわかるように文字や絵で示した絵暦のこと。そこに和歌・俳句・漢詩や、絵の中にパズルのように月の大小を表す要素を散りばめるなど、趣向を凝らしたものも作られるようになり、その美麗を競い合う愛好家グループが生まれた。

大田南畝の生家の向かい、牛込に屋敷を持つ旗本・大久保巨川（きょせん）（1722～1777）も愛好家の一人。巨川は当時まだ無名の絵師であった鈴木春信に大小暦の絵の制作を依頼し、暦の交換会を主催して大小暦の流行をリードする。

カラフルな浮世絵版画は、錦の織物の様に美しいことから「錦絵」と称され、「東錦絵（あずまにしきえ）」「江戸絵」とも呼ばれて江戸土産となった。

春信の死にあたり、南畝は市井の見聞雑事を記した『半日閑話』の中で「春信死す。この人浮世絵に妙を得たり。今の錦絵といふ物はこの人を祖とす」と記している。

左／大小暦の一例。歌川豊広『卯年大小暦』文政２年（1819）（都立中央図書館所蔵）。兎を象った刀装具が入っている箱の蓋には「大小分」と書かれている。箱を包む袱紗（ふくさ）には、大の月である二、四、五、六、八、九、十一が、鍔（つば）の下に描かれたたとう紙には小の月である正（一）、三、閏（うるう）四、七、十、十二が生地の柄のように描かれている。大小の配列と兎＝卯年から、文政２年（1819）己卯（つちのとう）の大小暦と推定される
右／鈴木春信「雪中相合傘」（メトロポリタン美術館所蔵）

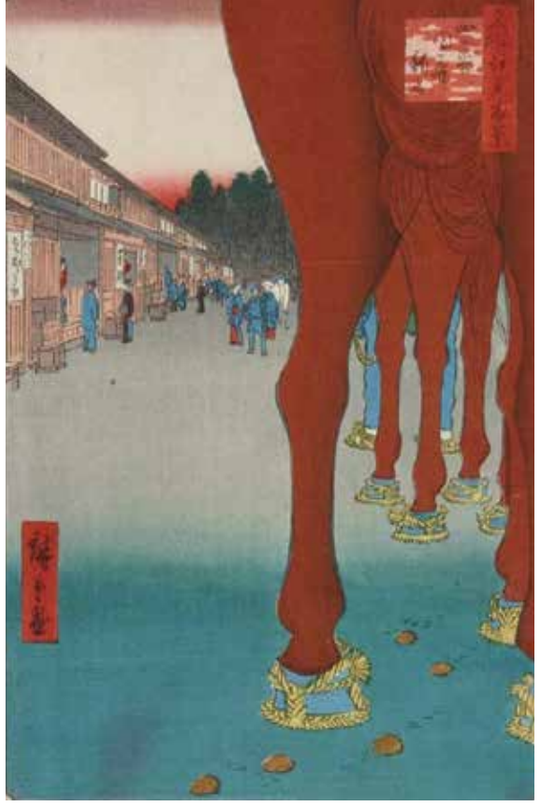
新宿 江戸の面影を訪ねて

世界一の乗降客数を誇る新宿駅（※）を擁する大都会・新宿。ビルが建ち並ぶ現在も、江戸の文化人たちが歩いた足跡を辿ることができる。

古代から近現代までの新宿の歴史を展示する「新宿区立新宿歴史博物館」には、新宿ゆかりの江戸文化人のコーナーもある。見ごたえがあるのは、内藤新宿の宿場の模型だ。建物が軒を連ね、人々や荷馬が往来し、活気ある様子が伝わってくる。学芸員の宮沢聡さんに案内していただいた。「内藤新宿は甲州街道の起点となる日本橋と、次の宿場である高井戸までの距離が遠かったことから、その間に新しい宿場を設けようと浅草の町名主・高松喜六らが幕府に願い出て元禄十二年（一六九九）に開設されました。信州高遠藩の内藤家や旗本屋敷の一部が召し上げられて、宿場の土地が造成されます（隣接する新宿御苑は内藤家の屋敷跡）。内藤新宿の範囲は四谷大木戸（四谷四丁目交差点あたり）を通って少し先、現在の新宿一丁目交差点から青梅街道と甲州街道が分岐する新宿追分（伊勢丹あたり）のあたりまで約一・二㎞。旅籠、茶屋、商店が建ち並んで繁華街になるとともに、武蔵野から江戸に集まる農産物などの物資の集積地としても発展しました」

内藤新宿の旅籠には飯盛女（めしもりおんな）、茶屋には茶屋女がいて、実際には遊女の役割をしていたともいわれており、岡場所（私娼街）としても賑わった。江戸時代後期、文化五年（一八〇八）には旅籠五〇軒、引手茶屋八〇軒があり、江戸四宿の中では品川宿に次いで繁栄したという。

内藤新宿の宿場町の模型。甲州街道と青梅街道が分岐する追分や、街道に並行して流れる玉川上水も見える


初代歌川広重「名所江戸百景 四ツ谷内藤新宿」（新宿歴史博物館所蔵）。内藤新宿には野菜や薪などを運ぶ荷馬が多かった様子が窺える。平秩東作も生家は内藤新宿の馬宿だった

内藤新宿の宿場を描いた『江戸名所図会』の「四谷内藤新驛」（新宿歴史博物館所蔵）天保５～７年（1834～1836）刊。「和國屋」という旅籠の前を通るのは、魚を売る棒手（ぼて）振り、馬に乗った旅人、荷を担ぐ商人。餅をつく人や、歳末の門付けの一種「節季候（せきぞろ）」の姿も見える

宮沢聡さん。後方の商家は、四谷にあった江戸時代の菓子商「荒井谷」の店蔵を実物大で再現したもの

東京都新宿区四谷三栄町 12-16
TEL 03-3359-2131
時 9：30～17：30
（入館は 17：00 まで）
休 第２・４月曜日
料 大人 300 円、
小中学生 100 円

※ 2022 年の１日の平均乗降客数は 2,704,703 人で、ギネス世界記録に認定

MAP B 太宗寺（たいそうじ）

上／住職の問川良元さん。閻魔堂内は通常は扉越しに拝観できる。毎年１月16日頃と７月16日頃の薮入りの際に開帳される　左／奪衣婆像。明治３年（1870）の制作と伝わる（昭和８年に再興）。高さ2m40㎝　右／閻魔像。文化11年（1814）に安置されたもので、高さ5m50㎝。関東大震災で大破し、体は昭和８年（1933）に再興した。弘化４年（1847）、泥酔者が閻魔像の水晶の目玉をくり抜いたところ、突然体がすくみ転倒し、御用となる事件があり、これは閻魔の霊験であると江戸中の評判になり、錦絵にも刷られた（共に新宿区指定文化財）

※ 三途の川のほとりで死者の衣類を剥ぎ取る老婆。それを木に掛け、枝のしなり具合でその人の生前の罪の軽重を判断する。子育ての神として信仰されることもある

内藤新宿の中でも中心となるのが新宿二丁目付近。中世より鎌倉街道が南北に通り、江戸幕府が開かれる前から太宗寺、正受院、成覚寺などの寺院ができていた。

太宗寺の始まりは慶長元年（一五九六）頃で、寛文八年（一六六八）以降、内藤家の菩提寺となった。江戸六地蔵の一つがあり、閻魔像や奪衣婆像（※）が庶民の信仰を集め、薮入り（商家の奉公人の盆と正月の休み）には縁日が出て賑わったという。六地蔵や閻魔像には今なお人々が手を合わせる姿が見られる。住職の問川良元さんは「ご自分のことだけでなく、他の人の幸せも願っていただくことが、仏様の教えにつながります。新宿は様々な方を受け入れる多様性の街と言われていますが、その始まりは内藤新宿の賑わいにあるのでしょう。他所者も排除することなく、他人の成功を一緒になって喜んでくれる。そんな気風があるから発展したのだと思います」と話す。

江戸に出入りする六つの街道筋に置かれた地蔵のひとつ、銅造地蔵菩薩坐像。正徳２年（1712）造立。像の高さは２ｍ67cm。像内には小型の銅造地蔵６体や寄進者名簿などが納入されていた（東京都指定文化財）

東京都新宿区新宿 2-9-2　TEL 03-3356-7731

MAP C 正受院（しょうじゅいん）

太宗寺の北に隣接する。文禄三年（一五九四）創建。奪衣婆像は咳止めの霊験があるとして庶民の信仰を集めた。正受院に押し入った泥棒が奪衣婆の霊力で捕らえられた、綿に引火した灯明の火を奪衣婆自らもみ消したなどの逸話がある。

元禄年間以前に安置されたといわれる奪衣婆像。頭にかぶる綿は咳止めのお礼参りに奉納されたという（新宿区指定文化財）

東京都新宿区新宿 2-15-20

MAP D 成覚寺（じょうかくじ）

上／旭地蔵（新宿区指定文化財）の台座には男女の７組の戒名が刻まれている。同じ日に亡くなっているので心中と思われる。向かって右隣が恋川春町の墓（新宿区指定史跡）　左下／子供合埋碑（新宿区指定文化財）　右下／白糸塚（新宿区地域文化財）

東京都新宿区新宿 2-15-18　TEL 03-3341-1053

※「子供」とは遊女のことで、抱え主の子どもであるという意味

こちらも太宗寺の北、正受院に隣接する。文禄三年（一五九四）創建。かつては「投げ込み寺」と呼ばれ、内藤新宿の宿場の飯盛女（遊女）たちの共同墓「子供合埋碑」（※）や、心中した者を供養する目的で玉川上水のほとりに建立された「旭地蔵」などがある。その他、内藤新宿の遊女・白糸と武士の鈴木主水の心中に因む「白糸塚」もある。二人の悲恋は歌舞伎や錦絵の題材にもなった。旭地蔵の隣には恋川春町の墓がある。

MAP E 浄栄寺（じょうえいじ）

浄栄寺は牛込の寺院で、元和二年（一六一六）創建。山門は江戸後期に建てられたもので、新宿区内に残る数少ない江戸時代の建築。その扁額に記された「甘露門」は大田南畝が名付けたものだ。十四代目住職の香阪辰也さんは次のように話す「南畝は吉原の遊女、三保崎（お賤）を身請けし、妾としました。お賤が病気になり、南畝は親しかった当寺にその身を預けます。八代目住職が南畝の狂歌の門下だったそうです。浄土真宗は妻帯を許すため、当寺の住職にも妻子がいました。この家庭的な雰囲気を見て、南畝も安心してお賤を預けられたのでしょう」

浄栄寺には、江戸琳派を代表する絵師で同じく南畝の狂歌の門下であった酒井抱一の絵や、南畝も聴いたとされる尺八が残り、江戸に生きた人々の息遣いを感じることができる。香阪さんは「新宿と言えば現代的な大都会のイメージがあるかもしれませんが、古地図のままの道が残っていたり、江戸時代からの町名が残っていたりと、そこここに歴史を感じられます。特にこの牛込や四谷は、江戸の面影を感じられる静かなエリア。普段何気なく歩いている道が歴史につながっていることを感じていただければ」と話す。

左／住職の香阪辰也さんと甘露門（新宿区指定文化財）
右／浄栄寺に伝わる尺八「放下着（ほうげじゃく）」。諸国を行脚した虚無僧が使用した尺八で、江戸時代中期より名器として知られていた。寺の六代目住職が尺八の名人で、南畝の狂歌仲間でもあった。南畝は寛政３年（1791）にその音色を聴いたと記している（新宿区指定文化財／通常非公開）

上／甘露門の扁額　下／牛込神楽坂出身の作家・竹田真砂子さんの『あとより恋の責めくれば 御家人南畝先生』（集英社）には、南畝とお賤、そして二人の恋を助ける狂歌仲間が描かれている。「竹田さんは当寺を訪れ、取材も行われました」と香阪さん

東京都新宿区市谷薬王寺町 19-10
TEL 03-3351-1936

新宿今昔瓦版

江戸の文化人や旅人が歩いた新宿の街。その歴史を現代に伝える取り組みや、ゆかりの店を紹介します。

内藤とうがらしプロジェクト

蘇らせた唐辛子で新宿の街を元気に

宿場町・内藤新宿で、収穫期には辺り一面を真っ赤に染めた「内藤とうがらし」。江戸っ子が愛した蕎麦に欠かせない薬味として親しまれた。これを現代に復活させようと二〇一〇年に始まったのが「内藤とうがらしプロジェクト」だ。企業と共同で七味とうがらしを商品化したほか、区内の小学校でその歴史、栽培、特徴などを伝えている。この活動をより広く伝えるため、学校、地域、企業が連携し十一月十六・十七日「新宿エコ・カル2024 in 新宿御苑」を開催した。

学生考案のレシピ「濃厚汁なし担々麺」の掲示など、様々な学習での成果を発表した

内藤とうがらしプロジェクト事務局
FAX 03-5827-2018
naito-togarashi.tokyo

大田南畝ゆかりの「四方（よも）」

狂名の由来は、江戸で評判の酒販店

寛永元年（一六二四）創業の酒販店「四方」は、銘酒「瀧水（たきすい）」や「四方の菖蒲酒（しょうぶざけ）」、酒の肴に提供した赤味噌が江戸市中で評判に。大田南畝が名乗った「四方赤良（よものあから）」は当時のはやり文句「鯛の味噌津に四方の赤 いっぱい呑みかけ山の寒がらす…」に因んだと言われる。

現在、四方の暖簾を守り続ける「赤坂四方」は、新宿御苑近くの大京町に延床面積四四五〇㎡を擁する流通倉庫を建設。併設された店舗「四季の瀧水」では、四季折々の日本酒や焼酎、ワイン、国産ウイスキーといった酒類だけでなく、購入した玄米の精米サービス等も行っている。

上／大田南畝、朋誠堂喜三二、山東京伝が詞を添えた鍬形蕙斎（くわがたけいさい、北尾政美）『近世職人尽絵詞』（和田音五郎模写）（明治時代、国立国会図書館所蔵）に描かれた四方　下／蔵元直送の銘酒が並ぶ「四季の瀧水」。こだわりのおつまみも揃う

四季の瀧水　東京都新宿区大京町 22-5　TEL 03-6709-9341　instagram.com/shiki_takisui

温故知しん！じゅく散歩

新宿の見どころをサイトで公開

新宿区では、区内の多彩な文化財や見どころをを集めたデータベースサイト「温故知しん！じゅく散歩」を公開中。国・都・区の指定・登録文化財をはじめ、寺社や坂道、パブリックアート、博物館や美術館、地元で長年愛されてきた商品や伝統の技などを写真や地図上の位置情報で表示して紹介。おすすめコースも掲載している。新たな発見と出会える「じゅく散歩」で、いつもの新宿をちょっと違う目線で楽しんでみては。

じゅく散歩

カテゴリー別に分かれており、検索もスムーズ

参考文献：鈴木俊幸『新版 蔦屋重三郎』（平凡社）、鈴木俊幸監修『別冊太陽 蔦屋重三郎 時代を変えた江戸の本屋』（平凡社）、小林ふみ子『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店）、浜田義一郎他編『大田南畝全集 第一巻・第十八巻』（岩波書店）、新宿区立新宿歴史博物館『常設展示図録 新宿の歴史と文化』、新宿区立新宿歴史博物館『「蜀山人」大田南畝と江戸のまち』、たばこと塩の博物館『没後 200 年 江戸の知の巨星 大田南畝の世界』、新宿区立新宿歴史博物館『新宿の文化財 新宿文化財ガイド 2013』、池享・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編『みる・よむ・あるく 東京の歴史 4 地帯編 1 千代田区・港区・新宿区・文京区』（吉川弘文館）

温故知しん!じゅく散歩

新宿文化観光資源案内サイト

https://bunkakanko-annai.city.shinjuku.lg.jp/

新宿区の文化財や史跡、寺社、博物館や美術館などをご案内するサイトです。「しんじゅく逸品」や「技の名匠」もご紹介しています。パソコンやスマートフォンで気軽に検索でき、散策に便利な「フィールドマップ」や「おすすめコース」も掲載しています。「温故知しん!じゅく散歩」で新宿のまちを楽しみましょう!

新宿観光案内所

新宿を訪れる人々に新宿の魅力や、観光スポット、イベントなどの各種情報をご提供します。新宿の観光をもっと便利に、楽しく。観光客の皆様のニーズにお応えしていきます。

所在地　東京都新宿区新宿3丁目37番2号
（新宿駅東南口下車すぐ）

営業時間　10:00~19:00
定休日なし（12月29日~1月3日は除く）

発行者 新宿区　編集 月刊『江戸楽』編集部　発行年月 2025年1月　印刷物作成番号2024-47-2801